

ダニエル8章

真の悔い改めへの呼びかけ

2025.1

「そして聖所は清められ」

2300の夕と朝の間

ダニエル8章のポイント

(1) これまでの各章が象徴的にまとめられ、そしてこれ以降の章の源となっている、と述べている。

1章から7章 → 8章にまとめられている。後半は8章を土台 ← 9章から12に展開

「**聖所の荒廃と回復**」

(2) ダニエル書全体の鍵となる聖句＝ダニエル8：14 「**2300の夕と朝との間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する**」。

8：9～14節では、大争鬭とその終結を象徴的に表現しています。14節の前は、これこれこんなことがいろいろある、それは一体、いつまでだろうか、という問いかけです。「いつまでだろうか」と。



「そして聖所は清められ」

2300の夕と朝の間

(ダニエル8章のポイント 続き)

人間、何か起こると「**なぜだろうか**」と普通は聞くものですが、聖書はそれよりも、「**いつまでだろうか**」と。つまり、こんなに悪いことがあるのも、あなたさまがそれを許しておられるからだとわたしたちは信じていますが、それでは、「いつまで」耐え忍べばいいのでしょうか、いつあなたさまはその力を本当に現して下さるのでしょうか。そういった問いかけです。

「2300日間、聖所は清められるであろう」

ダニエル 8:14

「あなたの民に七十週が定められている」



紀元前457年	B.C. 408		西暦27年	西暦31年	西暦34年		西暦18年～
軍事施設の 復元と構築	エルサレム 再建完了		イエス は洗礼の際に メシアとして 聖別され た	「週の真ん 中」で の イエスの死	ステファノは石 打ちにされ、 キリスト教徒は取り取り になり、ユダヤ 教徒の保護 観察は終了 した。	異邦人 に福音が 宣べ 伝えられた。	審判天国が 始まり ます。 ダニエル 8:13-14
ラ 7:12-26 ラ 6:14		70週 (490年)					

グッドソルト.CO

わたしは一年に一日を定めた エゼキエル4:6

メド（メディア）のスサの位置



ウライ川のほとりにて

- 1 われダニエルは先に幻を見たが、後またベルシャザル王の治世の第三年に、一つの幻がわたしに示された。
- 2 その幻を見たのは、エラム州の首都スサにいた時であって、ウライ川のほとりにおいてであった。



1節の「先の幻」とは、ダニエル7章の幻のことを意味しています。7章はベルシャザルの元年でしたから、その二年後、おそらく紀元前548年ないし547年と考えられます。「一つの幻」がその時与えられました。

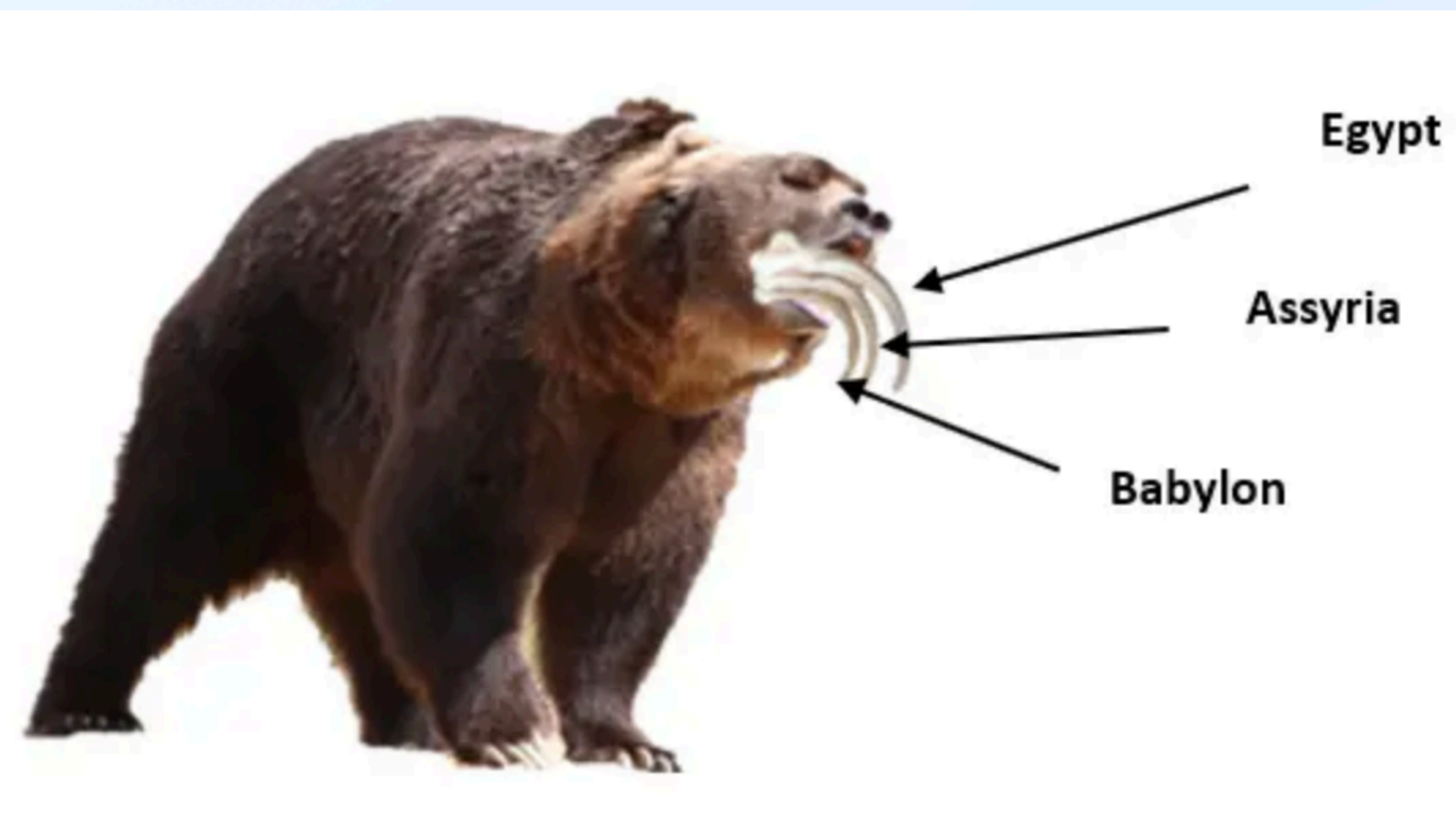
8章は、1節～14節が幻、15節～最後の27節までが説明の部分という構成になっています。



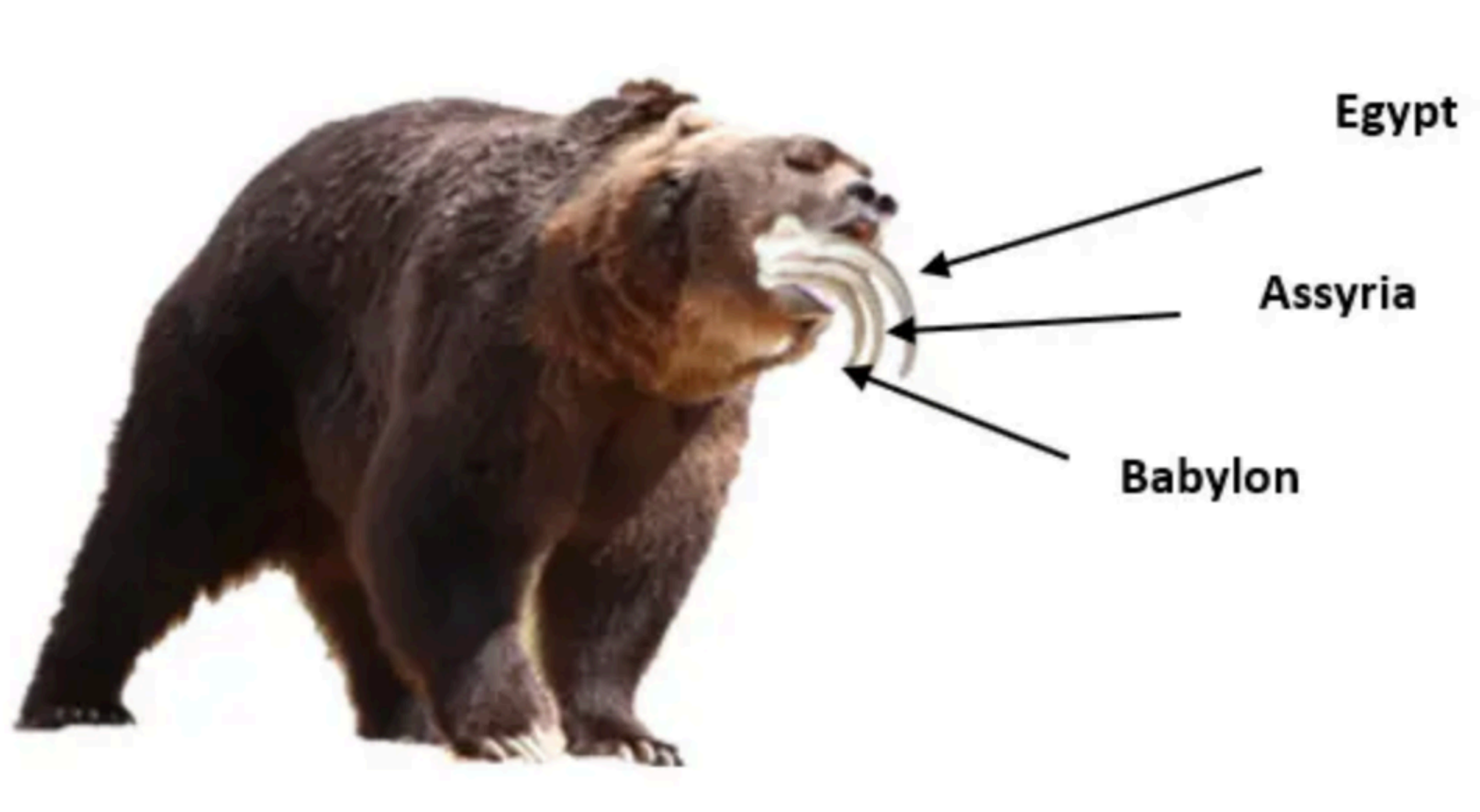
7章	8章	解き明かし
熊（5節） 「体の一方をあげ」 「3本の肋骨をくわえ」	雄羊（3、4節） 「二つの角があって」一つが長い 「西、北、南にむかって突撃」	「メディアとペルシャの王」 （8：20）
ひょう（6節） 「鳥の翼が四つ」 「四つの頭があり」	やぎ（5～8節） 「足は土を踏まなかった」 （「著しい角」） 『四つの著しい角』	「ギリシャの王」 （8：21）

ウライ川のほとりにて

3 わたしが目をあげて見ると、川の岸に**一匹の雄羊**が立っていた。これに**二つの角**があって、その角は共に長かったが、**一つの角は他の角よりも長かった**。その**長いのは後に伸びた**のである。
4 わたしが見ていると、その**雄羊**は、西、北、南にむかって突撃したが、これに当ることのできる獣は一匹もなく、またその手から救い出すことのできるものもなかった。これはその心のままにふるまい、みずから高ぶっていた。



幻は「**一匹の雄羊**」でしたが、二つの角と後に長く伸びた別の角を持つ奇妙な雄羊でした。これは、ローマ帝国と解釈されています。全ページの図をご覧になるとお分かりのように8章の雄羊は、7章のどの獣でしょうか？「熊」にあたります。解き明かしは、メディアとペルシャの王（ダニ8：20）を表します。3本の肋骨は、エジプト、アッシリア、バビロンを表します。



4節の「西、北、南にむかって突撃した」。西は、バビロンやリディアを滅ぼしたこと、南は、エジプトを制圧したこと、北はスクテヤやアルメニアを制服したこと、そのようなメディア・ペルシャの権勢や侵略活動を示します。

(3本の骨は、エジプト、アッシリア、バビロンを表す)

雄やぎ

5 わたしがこれを考え、見ていると、**一匹の雄やぎ**が、全地のおもてを飛びわたって西からきたが、その足は土を踏まなかった。このやぎには、目の間に著しい**一つの角**があった。

6 この者は、さきにわたしが川の岸に立っているのを見た、あの**二つの角のある雄羊**にむかってきて、激しく怒ってこれに走り寄った。



5 わたしがこれを考え、見ていると、**一匹の雄やぎ**が、**全地のおもてを飛びわたって西からきたが、その足は土を踏まなかった。このやぎには、目の間に著しい一つの角があった。**

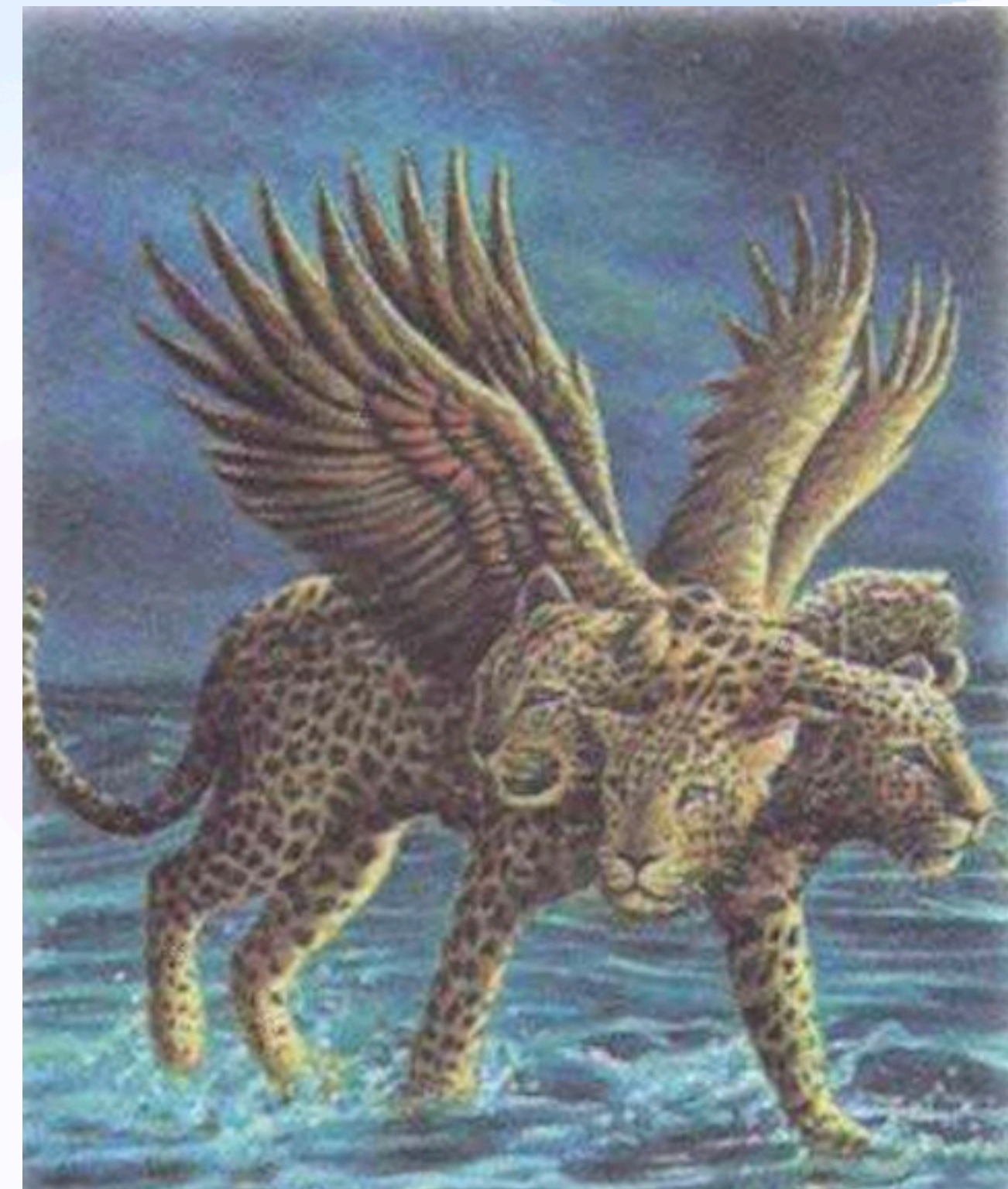
6 この者は、さきにわたしが川の岸に立っているのを見た、あの**二つの角のある雄羊**にむかってきて、**激しく怒ってこれに走り寄った。**

5節の**雄山羊**は、7章の**四つの頭を持つひょう**に当たります。

これも**21節**に書いてあります「**また、かの雄やぎはギリシヤの王です、その目の間の大きな角は、その第一の王です。**」

左図の通り、雄山羊は、アレキサンダー大王ですね。というように7章と8章は並行しています。

アレキサンダー大王の最期は深酒による急死です。雄山羊は雄羊に対抗します。





7 わたしが見ていると、それが雄羊に近寄るや、これにむかって怒りを発し、雄羊を撃って、その二つの角を砕いた。雄羊には、これに当る力がなかったので、やぎは雄羊を地に打ち倒して踏みつけた。また、その雄羊を、やぎの力から救いうる者がなかった。

8 こうして、その雄やぎは、はなはだしく高ぶったが、その盛んになった時、あの大きな角が折れて、その代りに四つの著しい角が生じ、天の四方に向かった。

こうして、大王急死により角がおれて、四つの別の角が出てきて、天の四方に向かいました。

9 その角の一つから、一つの小さい角が出て、南に向かい、東に向かい、麗しい地に向かって、はなはだしく大きくなり、

これは、ローマの台頭のようなものです。麗しい地とはパレスチナのことです。南に向かったのは、エジプトを属州（BC30）としたことです。東はシリア（BC64）、そして麗しい地、パレスチナのユダヤの地も属州（BC63）としました。ローマは、大帝国を築き上げました。

ローマ帝国とローマ・カトリック

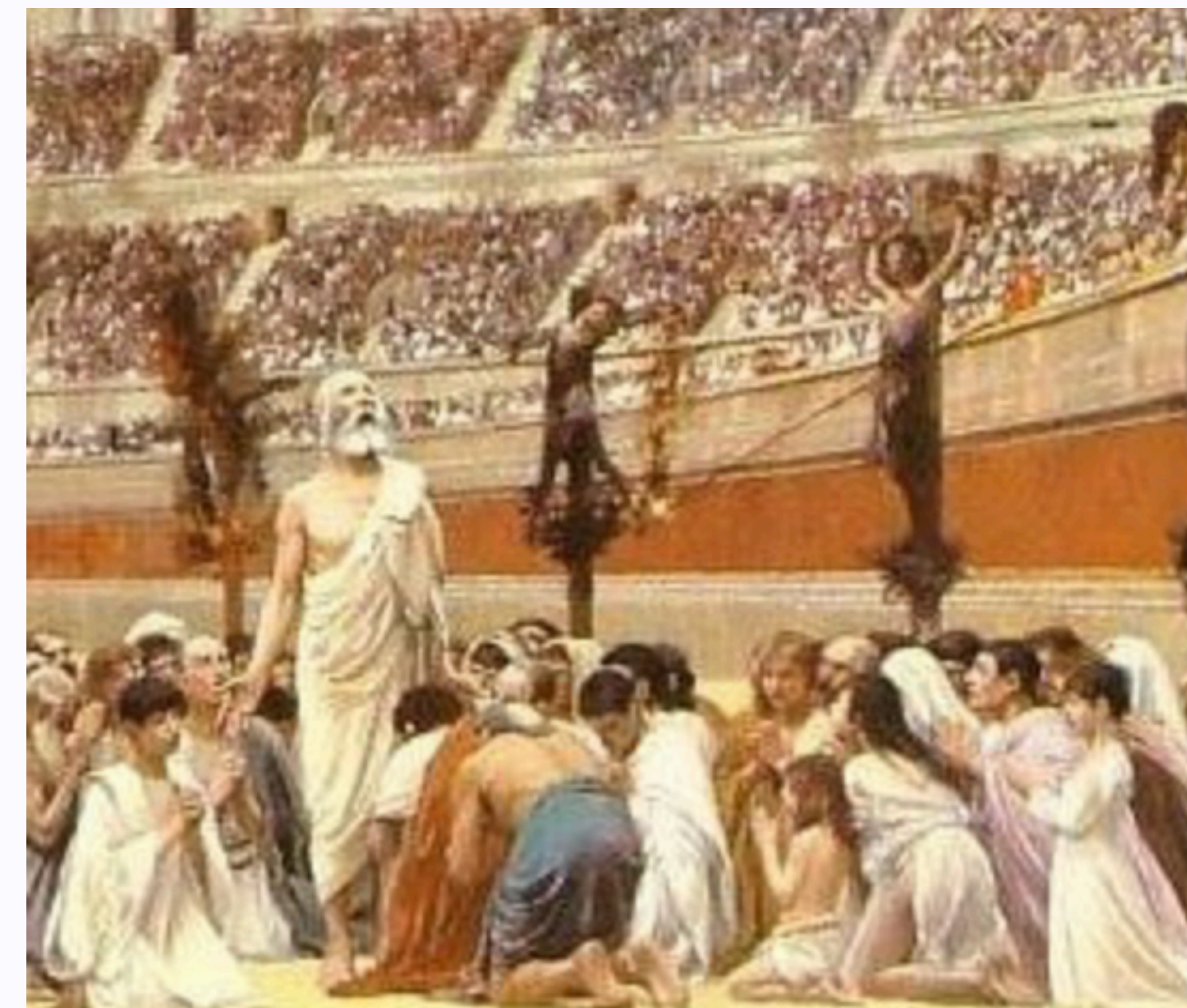
10 天の衆群に及ぶまでに大きくなり、星の衆群のうちの数個を地に投げ下して、これを踏みつけ、

11 またみずから高ぶって、その衆群の主に敵し、その常供の燔祭を取り除き、かつその聖所を倒した。

12 そしてその衆群は、罪によって、常供の燔祭と共に、これにわたされた。その角はまた真理を地に投げうち、ほしいままにふるまって、みずから栄えた。

10節は、イスラエルの民や「聖徒である民」（24節）を苦しめることをしています。これは、ユダヤ人制圧、初代キリスト教徒を迫害したローマ帝国にも、中世におけるカトリック教会に従おうとしないキリスト教徒たちを迫害したローマ法王権にも適用されます。

また、小さな角の活動範囲について。10節でローマは軍事力による領土拡大、宗教の面では、誤った教えの偶像礼拝の伝播浸透させ、神の民の迫害、11節から12節にある通り、まことの主の働きを阻害、神と人との大切な関係を妨害しようとする行動がありましたが、天に向かっての攻撃という側面をみることができます。



ローマ帝国とローマ・カトリック

11 またみずから高ぶって、その衆群の主に敵し、その常供の燔祭を取り除き、かつその聖所を倒した。

12 そしてその衆群は、罪によって、常供の燔祭と共に、これにわたされた。その角はまた真理を地に投げうち、ほしいままにふるまって、みずから栄えた。

11節。「**衆群の主**」とは、25節「**君の君たる者**」、すなわちイエス・キリストのことです。

ローマ帝国の政権下にキリストは十字架につけられたことを指します。ローマはカトリックがキリストの代わりに法王を頭ににし、キリストを信じる信仰による義に代え、教会の定めた義を前面に出します。キリストによるとりなしではなく、司祭や聖母や聖人たちによるとりなしを教えています。こうしてローマ・カトリックは、天におけるキリストの大祭司としてのとりなしのお働きを取り除いたと解釈されています（ヘブル7：25、1ヨハネ2：1）。11節の最後の言葉「**その聖所を倒した。**」は、ローマがエルサレムの神殿をを崩壊させたことにも適用できると思いますが、カトリックが天の聖所のキリストの仲保と救いのお働きを阻害したと考えるほうがより妥当ではないかと思われます。



ローマ帝国とローマ・カトリック

12 そしてその衆群は、罪によって、常供の燔祭と共に、これにわたされた。その角はまた真理を地に投げうち、ほしいままにふるまって、みずから栄えた。

ローマはさまざまな非聖書的な、異教的な教えを取り入れて、聖書の真理（特に天の聖所におけるキリストの仲保と救いのみわざという重大な真理）をあいまいにしていまい、このようにして隆盛をきわめるローマカトリック教会を表すと解釈されます。

聖書の回復

13 それから、わたしはひとりの聖者の語っているのを聞いた。またひとりの聖者があって、その語っている聖者にむかって言った、「常供の燔祭と、荒すことをなす罪と、聖所とその衆群がわたされて、足の下に踏みつけられることについて、幻にあらわれたことは、いつまでだろうか」と。

14 彼は言った、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」。

聖所の回復

13 それから、わたしはひとりの聖者の語っているのを聞いた。またひとりの聖者があって、その語っている聖者にむかって言った、「常供の燔祭と、荒すことをなす罪と、聖所とその衆群がわたされて、足の下に踏みつけられることについて、幻にあらわれたことは、いつまでだろうか」と。

13節では、このなすがままにされているのは、いつまでだろうか、と尋ねています。これは、天使たちが話し合っている場面です。「ひとりの聖者」とは天使のことです。主のとりなしのお働きが除外されて、真理が踏み躪られて、聖所も衆軍も足の下に踏みつけられています。こんなことはいつまで続くのか、いつ終わるのだろうか。



聖所の回復

14 彼は言った、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」。

この14節を裏付ける聖句として、あまり用いられない聖句があります。出エジプト記29：39と同じ29：42です。

「**その一頭の小羊は朝にこれをささげ、他の一頭の小羊は夕にこれをささげなければならない。**」出エジプト29：39



聖所で捧げ物は「朝、夕」毎日でした。「朝に、夕に」ではありません。創世記で「夕となり朝となった」（創世記1：5）と書かれていますが、これはあくまでも1日を数える場合に使われています。犠牲の場合は必ず、朝、夕という順序です。ですから、**二千三百の夕と朝**というのを、朝と夕の犠牲ととるのは言葉の順序から言って他に例がありません。

聖所の回復

「**これは**あなたがたが・・・・主の前に絶やすことなく、ささぐべき**燔祭**である。」出エジプト29：42

42節の最初の言葉は、「**これは**」と書かれていて、夕と朝を一つのもので見えています。ですから、朝と夕とわけるのはではなく、**二千三百の「一日」**と考えるのが自然です。

創世記にあるように、**夕と朝で一日**ですから、そのまま字義通り、**二千三百日**となります。

9章でもまた触れますが**二千三百日は、聖書の預言解釈の原則に従い、一日を一年として2300年とします**。このようにして、天使たちの会話にあった、「**いつまでだろうか**」の答えを計算することができるのです。



聖所の回復―清められる



14 彼は言った、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」。

14節の「清められて」ですが、原語「ニツダク」は「義と宣言される、正しさが証明される（疑いが取り去られる）」と訳すことができます。これはもともと広い意味を持つ言葉ですが、その中心点は、「審理し、無罪とし、救済するという審きと救いの過程を示す」ことにあります。

間違ったことが正されて、神様の「聖所」が正しい姿で現れてくることを意味しています。つまり「聖所の回復」―これはダニエル書がずっと言ってきていますが、神様のみ名が再びあがめられ、神様を信じてきた民の、その正しさが明らかにされる、そういうことを意味しているのです。



聖所の回復―清められる

8：13と14節で「**聖所**」という言葉が正面にはっきり出てきましたが、そもそもこの**ダニエル書8章全体が、聖所を中心**にしています。興味深いことに、この8章の冒頭に登場した動物は燔祭に用いられる動物である、**羊と山羊**でした。**7章に出てきた獣は、熊とかひょうとか、怪獣**とかでした。

四つの角という表現は、**出エジプト27章**に出ていますが、**燔祭の祭壇の四つのかど**が、しばしば**四つの角と呼ばれています**。あるいは、「**常供の**」という言葉が**犠牲制度全体を象徴する言葉**になっています。

このようなことから、8章は聖所を中心として描かれていると考えることができます。

聖所について

聖所については、別のPDFで詳しくご説明します。



解き明かし

15 われダニエルはこの幻を見て、その意味を知ろうと求めていた時、見よ、**人のように見える者が、わたしの前に立った。**

16 わたしはウライ川の兩岸の間から人の声が出て、呼ばれるのを聞いた、「**ガブリエルよ、この幻をその人に悟らせよ**」。



ダニエルは、これまでの幻を知りたいと願いました。すると、ガブリエルが現れます。ガブリエルは、サタンの後を継いで天使の長となった天使です。天における最高位の天使とされますが、新約聖書では、ルカ1章に登場しています。「**ガブリエルよ、この幻をその人に悟らせよ**」この言葉は、キリストと考えられます。

(17節から22節は、特段注解の必要なものでもなく、説明もしましたしダブりますので、割愛させていただきます)

解き明かし

23 彼らの国の終りの時になり、罪びとの罪が満ちるに及んで、ひとりの王が起るでしょう。その顔は猛悪で、彼はなぞを解き、

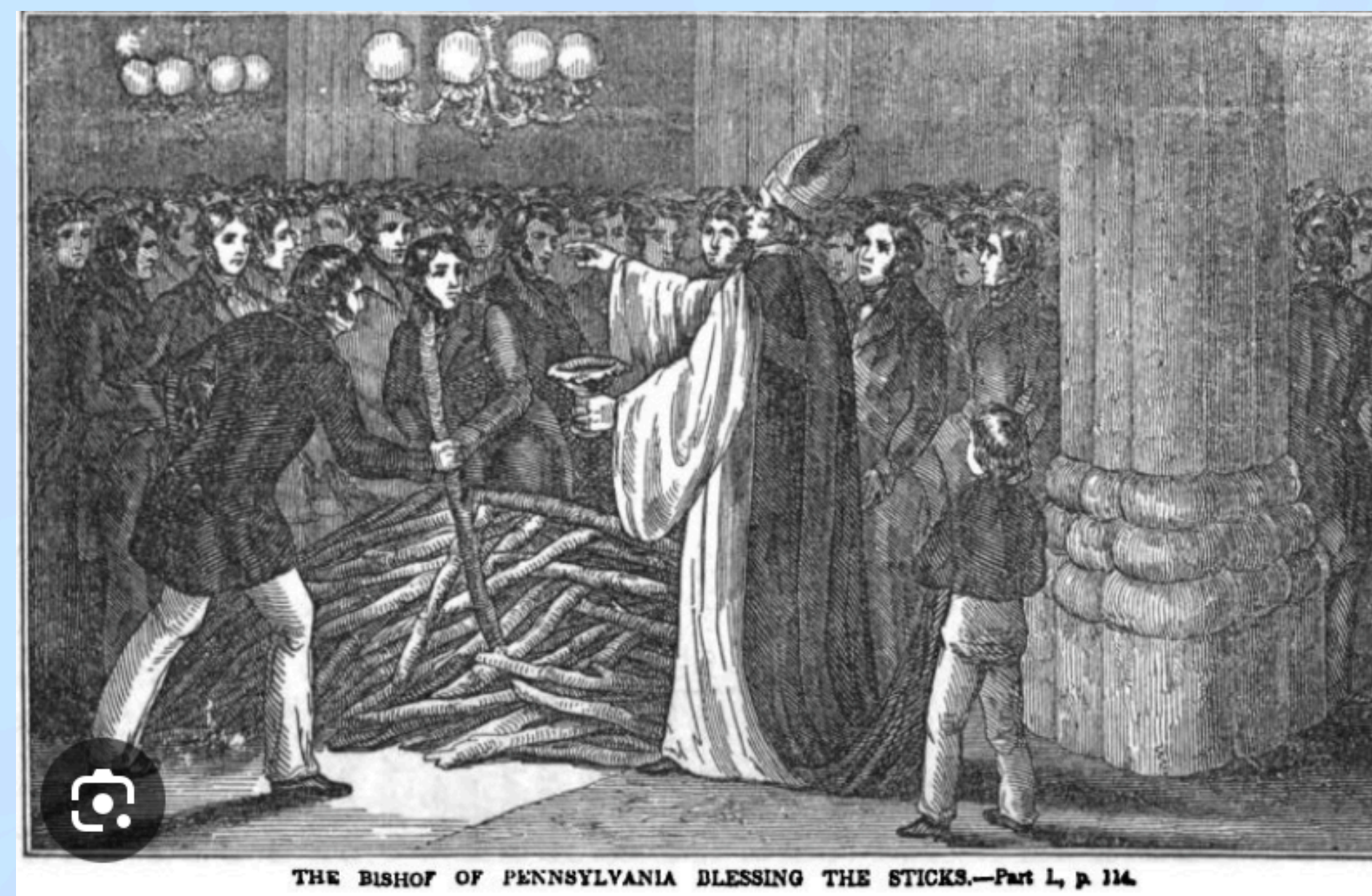
24 その勢力は盛んであって、恐ろしい破壊をなし、そのなすところ成功して、有力な人々と、聖徒である民を滅ぼすでしょう。

。

25 彼は悪知恵をもって、偽りをその手におこない遂げ、みずから心に高ぶり、不意に多くの人を打ち滅ぼし、また君の君たる者に敵するでしょう。しかし、ついに彼は人手によらずに滅ぼされるでしょう。

26 先に示された朝夕の幻は真実です。しかし、あなたはその幻を秘密にしておかなければならない。これは多くの日の後にかかわる事だから」

27 われダニエルは疲れはてて、数日の間病みわずらったが、後起きて、王の事務を執った。しかし、わたしはこの幻の事を思って驚いた。またこれを悟ることができなかった。



解き明かし

23 彼らの国の終りの時になり、罪びとの罪が満ちるに及んで、**ひとりの王が起る**でしょう。
その顔は猛悪で、彼はなぞを解き、

「**ひとりの王**」とは、ローマです。ローマ帝国とその後継者である**ローマ法王権**。
「**その顔は猛悪で、彼はなぞを解き**」の顔というのは、**冷酷さ、非情さ**を表しています。なぞを解くというのは、**陰険で狡猾な性格**というか、**ローマ教会のずるさ、あるいは抜け目なさ、そういったものを表す**と考えられています。

24 その勢力は盛んであって、恐ろしい破壊をなし、そのなすところ成功して、有力な人々と、聖徒である民を滅ぼすでしょう。

確かに彼らの力は強くなるが、「**背後に神のご計画がある**」（新改訳）、「**背後にサタンがいる**」と解釈することができます。歴史的に見た場合、**法王権が中世ヨーロッパの封建的・諸権力の拮抗という状況のもとに権威を持ち得たことを示す**とも解釈されています。

解き明かし

25 彼は悪知恵をもって、偽りをその手におこない遂げ、みずから心に高ぶり、不意に多くの人を打ち滅ぼし、また君の君たる者に敵するでしょう。しかし、ついに彼は**人手によらずに滅ぼされる**でしょう。

「**一つの石が人手によらずに**」という聖句を思い起こします。ダニエル2：34、45です。人間的手段ではなく、神によって滅ぼされる。神がすべてを支配しておられ、悪しき勢力をも終わらせられるのです。

26 **先に示された朝夕の幻は真実**です。しかし、**あなたはその幻を秘密にしておかなければならない。これは多くの日の後にかかわる事だから**」。

似たような表現は、ダニエル2：45「**その夢はまことであって、この解き明かしは確かです。**」 厳粛な宣告です。

ダニエルは疲れ果てたが、仕事に復帰した

27 われダニエルは疲れはてて、数日の間病みわずらったが、後起きて、王の事務を執った。
しかし、わたしはこの幻の事を思って驚いた。またこれを悟ることができなかった。

普通ならば、こんなに難しい難解な幻を見たら、しばらく休暇をとって休みたいところですが、ダニエルは数日の間休んだ後、王の事務に復帰しました。



8章は、二千三百という大きな預言しか目に入らないことが多いですが、よく読んでみると、ダニエルは自分の仕事に復帰しました。これが大切なことではないでしょうか。時代のしるしをみるという預言的大きな目を持つと同時に、手近な義務を責任をもって果たしていく、ということが私たちにも求められているのではないのでしょうか。

ダニエル8章 完。